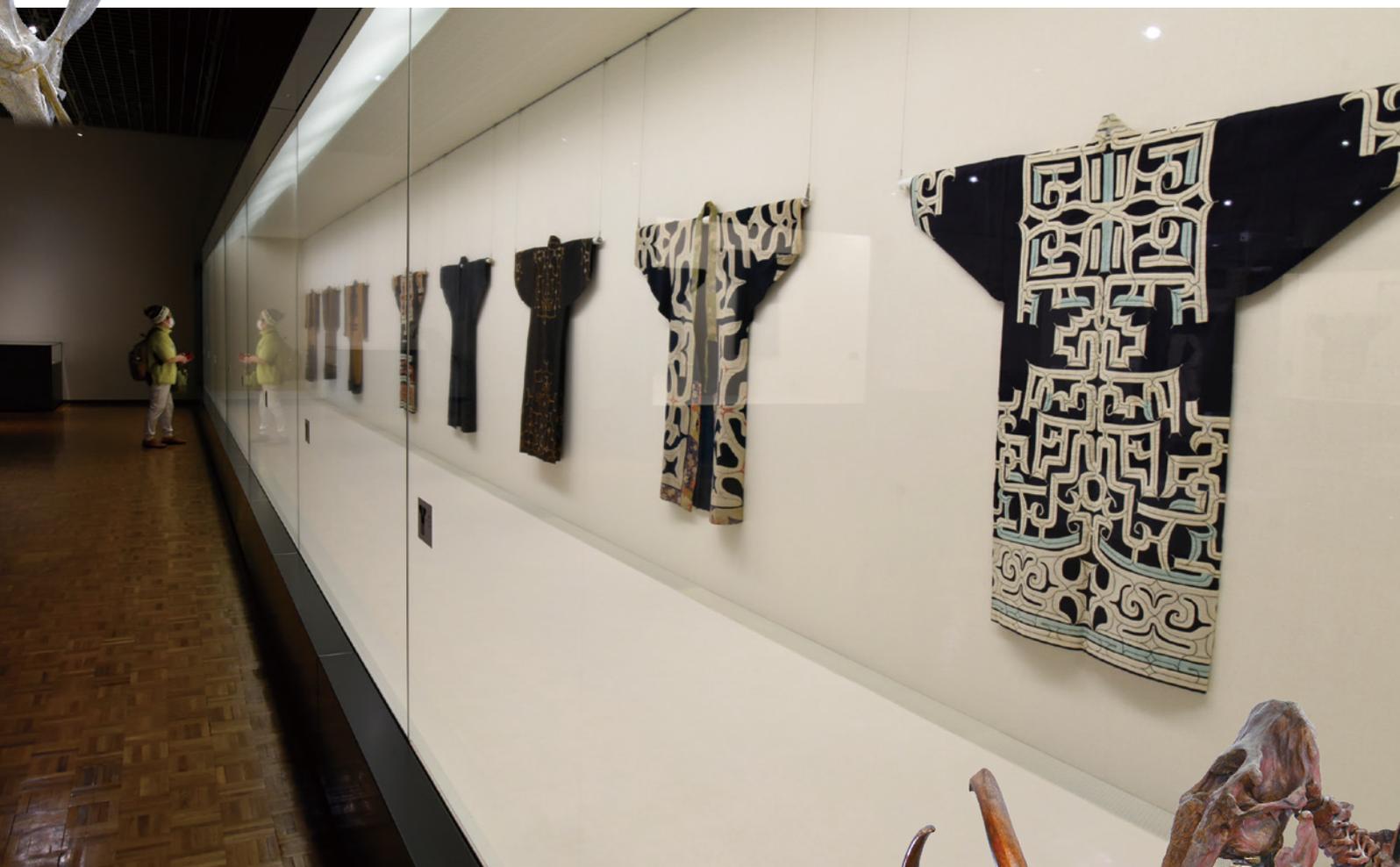




森のちやれんがニュース

2025 夏

Newsletter vol.40



第4回蔵出し展 「アイヌの衣服 — 北海道博物館の所蔵資料から —」を 開催しました (2025年4月26日～6月15日)

当館の所蔵するアイヌの衣服をずらりと並べた展示を開催しました。

当館は木綿衣じんびいや鞆皮衣（樹皮衣や草皮衣を指す）など約200点のアイヌの衣服を収蔵しています。その素材は脆弱なものも多く、頻繁に展示することは叶いません。また、普段は展示スペースの制約があることから、本展は多くの資料を見比べることのできる貴重な機会となりました。

本展で展示できなかったものは、来館された皆さまにお気に入りを投票し

てもら「総選挙」コーナーに写真で登場しました。総合展示では常時数点の衣服が展示されており、得票数の多かった資料は来年度の展示替えで登場する予定です。

企画テーマ展や特別展とはコンセプトの異なる「蔵出し展」。約30点の資料をゆったりじっくり見る展示は、皆さまにまた違った楽しみをお届けできたのではないのでしょうか。

(学芸員 鈴木あすみ)

CONTENTS

- ② [新館長よりごあいさつ](#)
今こそ、博物館の時代!
- ③ [総合展示紹介・第2テーマ](#)
“もっと知りたい”にお答える
「アイヌ文化Q&A」
- ④ [研究活動紹介](#)
“北海道3億年の地史”の紹介を目指して
[解説案内スタッフレポート](#)
「？」を「!」へ…
- ⑥ [「やってみる」で興味のタネを育てよう!](#)
[トピックス](#)
文化観光推進事業による「三等客車」の展示改修
- ⑦ [アイヌ民族文化研究センターだより](#)
新センター長よりごあいさつ
- ⑧ [活動ダイアリー](#)
2025年3月～2025年5月の記録

新館長よりごあいさつ

今こそ、博物館の時代！

荒川 裕生

北海道博物館長



本年4月1日、石森秀三前館長の後任として北海道博物館長に就任いたしました。

2015年4月に北海道開拓記念館と北海道立アイヌ民族文化研究センターを統合して開設された北海道博物館は、今年で10周年を迎えました。この間、石森前館長のもと、「総合博物館」としての礎が築かれてきたところであり、その道筋を大切にしながら、子どもから大人まで各年齢層の方々、国内外からお越しいただく皆様の多様な学びのニーズに対応する博物館づくりを進めてまいります。

今私たちは、ここ数年のAIの急拡大、国際情勢の不安定化など、先の見えにくい激動の時代を迎えています。私は、こういう時こそ、時間軸と空間軸に沿って「俯瞰」すること、そして同時に自らが依って立つ地域の価値をより深く理解することが重要であると考えます。近年新たな知見が次々に明らかになっている地球史や人類史を知り、その上でグローバル社会が抱える課題解決への道を探求すること。北海道はどのようなプロセスを経て形づくられてきたのか、自然環境や産業にはどのような価値があり、どう継承していくべきなのかを広く共有することで。

こうした視点で、北海道博物館が果たすべき役割は益々大きくなっていくものと考えており、皆様に楽しく安心・安全にご利用いただくことはもとより、急速に発達するICT技術を活かした情報の発信・提供、さらには急増するインバウンドへの対応も含めた文化観光拠点としての魅力アップなどに努めてまいります。

当館では、長年にわたり海外との交流を重ねてきていますが、残念ながら

コロナ禍や国際環境の変化で中断している地域もあります。そのような中、カナダのロイヤル・アルバータ博物館とは、北海道とアルバータ州の姉妹提携45周年を機に、「友好館に関する覚書」を更新いたしました。

先般、北海道からの訪問団の一員としてエドモントンを訪れ、5月23日、ロイヤル・アルバータ博物館において、両館長で友好館に関する覚書更新の署名を行いました。また、恐竜やマンモスの化石など貴重な収蔵品のバックヤードや魅力的な展示を見学させていただき、今後の交流への期待が高まりました。

私としてはこれから、職員の皆さんと力を合わせて、豊かな森に抱かれた北海道博物館が、道民の皆様のおかげがえのない財産として次世代に引き継がれていくよう取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



総合展示紹介・第2テーマ

“もっと知りたい”にお答えする 「アイヌ文化Q & A」

亀丸 由紀子*1・吉川 佳見*2

アイヌ民族文化研究センター 学芸員*1 研究主査*2

「アイヌ文化Q&A」をご存じですか？

第2テーマ「アイヌ文化の世界」の一角には、お客様からのアイヌ文化に関する質問を受け付けている場所「アイヌ文化Q & A」があります。ここでは、日々、お客様から寄せられるさまざまな疑問に、一問一答形式でお答えしています。

第2テーマは、次の4つのコーナーで構成されています。

- 1 現在を知る
- 2 伝統を学ぶ
- 3 ことばを聴く
- 4 歩みをたどる

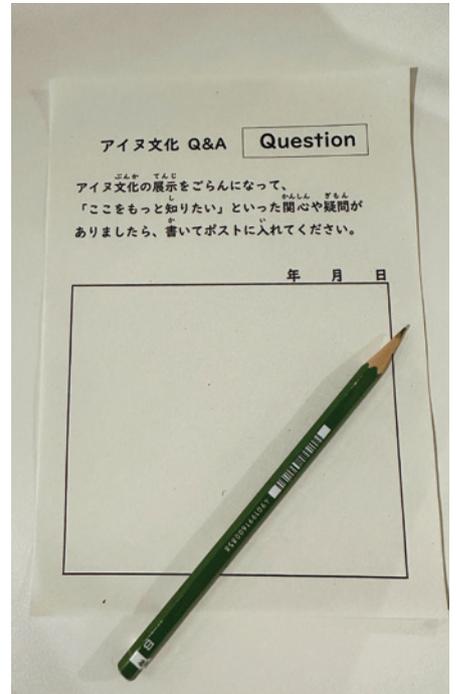
「アイヌ文化Q & A」は、「4歩みをたどる」の展示が終わった場所に位置しています。したがって、展示を見たお客様の「ここを、もっと知りたい」

にお答えすることを目的としたものではありませんが、展示に関連して、アイヌ文化全般についての質問・疑問を頂いています。

「Q&A」を介したお客様と博物館の対話

さて、この質問の回答を作成しているのが、私たち北海道博物館アイヌ民族文化研究センター（以下、センター）の職員です。センターには、現在、アイヌ語、アイヌ民具・生活技術、アイヌ史、アイヌ音楽を専門とする職員が在籍しており、毎回、数多く寄せられる質問の中から、なるべく幅広いジャンルにお答えできるように、それぞれの専門を活かし、最新の研究成果もふまえて、回答を作成しています。

このように「アイヌ文化Q & A」は、“(展示したものを) 見る/見てもらう”

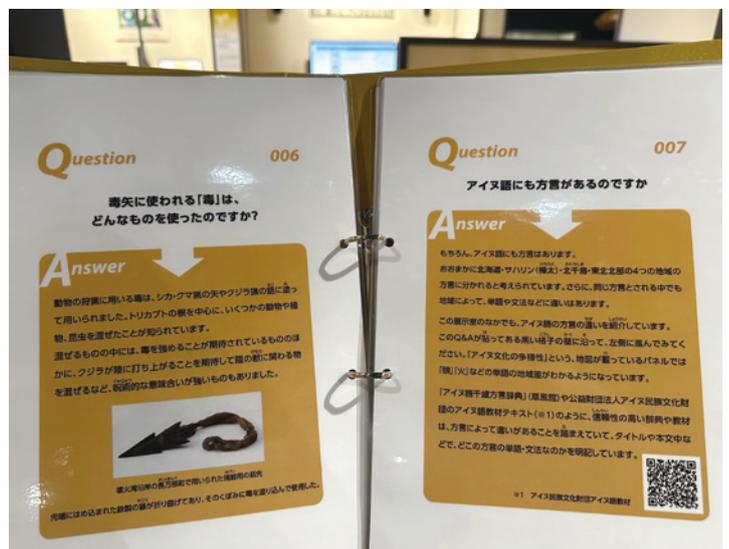


質問用紙に“もっと知りたい”ことを記入して、投函してもらうシステム

という一方的なやり取りにとどまらず、お客様と博物館が対話する場のひとつとしても位置付けられています。現在は、半年に一度、2問ずつのペースで回答を入れ替えていますので、当館にお越しの際は、ぜひ注目してみてください。



「アイヌ文化Q&A」のコーナー



これまでの「Q&A」もまとめて閲覧できます

研究活動紹介

“北海道3億年の地史”の紹介を目指して



写真は、浦幌町で地質調査をしているところ。右下：成田敦史、右上：久保見幸、左上：圓谷昂史。左下：地質調査にご協力いただいた浦幌町立博物館の持田誠学芸員。

1 博物館の地学資料と調査研究

当館では岩石、鉱物、化石などの地学資料を7,674件収蔵しています(北海道博物館, 2024)。代表的な資料は、当館が立地する石狩低地帯の野幌丘陵から産出した、新生代第四紀(約258万年前～現在)の化石です。例えば、ナウマンゾウやマンモスゾウなどの陸生哺乳類をはじめ、クジラやセイウチなどの海棲哺乳類、貝類などの海棲無脊椎動物があります。これらの化石が見つかった地層を詳しく調べてみると、約100万年前は陸地ではなく、日本海と太平洋(石狩市～苫小牧市のあ

たり)をつなぐ海峡があったことが明らかになりました。このことは、当館総合展示第1テーマで詳しく紹介しています(図1)。

北海道の地質学的な歴史(北海道の地史)は、古生代石炭紀(約3億年前)に遡ると考えられています。ここから現代までの間に、大地や気候は大きく変動し、生き物も絶えず入れ替わってきました。私達は、この石狩低地帯を中心に、全道各地を訪れて、3億年の地史を紐解くための調査研究をしています。ここでは、2020(令和2)～2024(令和6)年に実施した、北海道博物館『北海道の自然・歴史・文化総合研究プロ

圓谷 昂史^{*1}・成田 敦史^{*1} ・久保見 幸^{*2}

北海道研究センター(自然系) 学芸主査^{*1} 学芸員^{*2}

プロジェクト「石狩低地帯北部地域を中心とした新生代の古環境復元Ⅱ」の一幕を紹介します。

2 研究概要

本研究プロジェクトの目的は、①北海道の新生代(約6,600万年前～現在)に関する地学資料を対象に古環境を復元すること、②①で得られた研究成果を活用した展示や教育普及を通して道民の皆様にご紹介すること、の2つです。当初、第四紀の貝類化石を研究する筆者の圓谷が中心となり、調査を進めてきました。その後、2021(令和3)年に地質年代学を専門とする久保見、2022(令和4)年に古植物学を専門とする成田が着任したことで、より幅広い分野の研究が可能になりました。そこで、③石炭紀～中生代白亜紀(約3億年～6,600万年前)に関する地学資料を対象に古環境を復元すること、を追加しました。

2022年は、北海道東部の浦幌町で、恐竜絶滅時の痕跡を示す白亜紀-新生代古第三紀(K/Pg)境界を調査しました。この境界は、東アジアで唯一、本町に分布するとされています(久保見ほか, 2024)。次章からは2023年と2024年の調査概要を紹介します。

3 2023年調査「三畳紀の石灰岩」

北海道南部の渡島半島地域で、道内最古級の岩石を調査しました。この地域には、石炭紀～中生代三畳紀(約3億～2億年前)のサンゴやフズリナなど、主に炭酸カルシウム(石灰分)の殻を持つ生き物の死骸が積もってきた石灰岩が分布しています。調査対象とした石灰岩は、“上磯石灰岩”と呼ばれるもので、北斗市の巽朗鉱山に大規模に露出しています(図2)。

調査の結果、“上磯石灰岩”は石灰岩と、石灰岩に不純物が混ざってできた苦灰岩で構成されており、層状、塊



図1 総合展示第1テーマ「北海道120万年物語」



図2 “上礫石灰岩”の露頭(北斗市: 義朗鉱山) (写真中の黒いバーは約2mを示します)

状、角礫状、および小さな断層などの堆積構造を観察できました。多様な構造は、遠い海洋プレート(地球の表面を覆う岩盤)上にあった石灰岩が、長い年月をかけて移動し、地表に現れるまでに複雑な物理的・化学的な力を受けたことを示しています。また、石灰岩からは、コノドントと呼ばれる動物の歯の化石が報告されており、堆積した年代は少なくとも約2億年前と推定されています(坂上ほか, 1969)。

ところで、石灰岩はセメントの原料となるため、現在もこの鉱山で採掘されています。2億年前にできた岩石が、建材として姿を変え現代の土木建築や

インフラを支えている、と考えると、地球の営みの恩恵を改めて感じることができました。

4 2024年調査「新第三紀の植物化石」

北海道北部の士別市と美深町を含む名寄盆地周辺で調査しました。本地域では、新第三紀中期中新世(約1,300万~1,100万年前)の地層が分布しています。当時の日本列島は、大部分が海に覆われていたため、海底に砂や泥がたまってきた地層が多いです。しかし、陸でできた珍しい地層もあり、その一つが美深層^{びふかそう}です。美深層からは、これまで30種以上の葉や果実などの植

物化石が見つっています。産出する化石からブナやカエデなどの広葉樹と、トウヒなどの針葉樹の混交林植生が存在したことが明らかになっています。2020年にはヤナギ科の新種、*Salix palaeofutura* (サリックス・パラエオフトゥラ)も報告されており、日本の植物化石研究の重要地域とされています(Narita et al., 2020)。

今回は、より詳細な古植生を明らかにするための研究用試料と、展示や教育普及で活用するための試料を採集しました。その中には、この地域で初めて産出した果実の化石も含まれており現在、解析中です(図3)!

また、「幌加内オフィオライト」と呼ばれる、通常、陸上では確認することのできない、海洋プレートの一部がめくれ上がってできた岩石も調査しました。2023年調査の石灰岩と同様、北海道の大地の形成過程を示す、貴重な地質学的証拠です。

5 今後の課題

5年間の調査研究を通して、数多くの知見と地学資料を収集することができました。一方、“北海道3億年の地史”の紹介には、地質年代の再検討という課題が残されています。近年の分析機器の発達で、より詳細な年代測定が可能になっています。今後は、本プロジェクトで得られた資料を中心に、特に地質年代学的研究を進め、当館の総合展示や企画展示、教育普及などのイベントで成果を公表していきたいと思っています。

■引用文献

- ・北海道博物館, 2024, 北海道博物館要覧 第8号(要覧2022・2023年度) - 第2期中期目標・計画 実績報告書 3:1-174.
- ・久保見ほか, 2024, 北海道十勝郡浦幌町に分布する根室層群の白亜紀/古第三紀(K/Pg)境界の剥ぎ取り標本の作製記録, 浦幌町立博物館研究紀要 24:11-16.
- ・Narita et al., 2020, Late middle Miocene Konan flora from northern Hokkaido, Japan. Acta Palaeobotanica 60:259-295.
- ・坂上ほか, 1969, 北海道渡島半島上礫石灰岩のコノドントとその地質時代の考察, 地学雑誌 78:415-421.

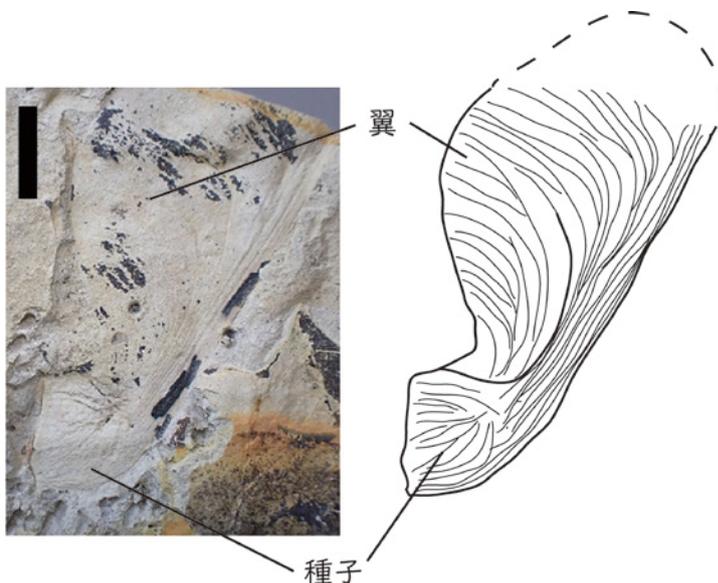


図3 カエデの仲間の巨大な果実の化石(翼果)の写真(左)とそのスケッチ(右)。この化石に近い現代のカエデの翼果と比較すると、3倍以上の大きさがあります(写真中の黒いバーは1cmを示します)。

解説案内スタッフレポート

「？」を「！」へ…「やってみる」で興味のタネを育てよう♪

辻 幸恵

事業部 教育・広報課 解説員

皆様、この春開催された第4回蔵出し展「アイヌの衣服—北海道博物館の所蔵資料から—」はご覧いただけましたでしょうか？ひとつひとつ手仕事で刺しゅうを施したアイヌ衣はとても見応えがありました。そのアイヌ刺しゅう…はて？どのように文様を作っているのだろう？と思ったりしませんか？その「？」＝「興味のタネ」を→→→「！」＝「なるほど」に育てるのを、はっけん広場がお手伝いします！

今回の蔵出し展の会期にあわせて、はっけんイベント「アイヌ文様の卓上春カレンダーを作る」を実施しました。テープ状の布の代わりに紙テープを折り曲げて、幅広の布の代わりに色紙を切り抜いて、それぞれがどのようにしてアイヌ文様になっていくのかをカードの上に表現しました。刺しゅうはま

だ難しい小さな子ども達も針の代わりにクーピーで、ここでツノをつけて…と自由な線を描きながらも、アイヌ刺しゅうの特徴をしっかりと覚えていました。こだわりの大人の方は、紙の文様をステップに本格的なアイヌ刺しゅうをやってみたい！と、興味のタネから

いきなり開花する人もいました。

これからも、はっけん広場では展示会に関連した楽しいイベントを続々計画中です！展示をご覧になった後は、是非はっけん広場にも足を運んで興味のタネを育てていってくださいね♪



親子で刺しゅうをたどる



ステキに完成しました！

トピックス

文化観光推進事業による「三等客車」の展示改修

山 際 秀 紀

北海道研究センター(人文系) 学芸主査

2025年3月、総合展示第3テーマの「三等客車」が文化庁の補助事業でリニューアルしました。この展示は、1971年に寒冷地の衣服（晴れ着と作業着、洋装と和装）、ストーブなどの展示として、北海道開拓記念館（当時）に作られたものです。大正時代の普通列車を舞台にして、方言を使った産業の会話も楽しめる展示となっています。

この列車が走っているのは、倶知安から小樽までの区間あたりです。夕闇がせまり寒くなってきたのでストーブを焚いています。大正時代にリンゴ栽培が余市地方で発達したこと、ニシン漁はそれ以上に盛んだったこと、「醤油や酒も凍る」ほど寒かったことなどが話されています。今では、話す人も少なくなった方言での会話を文字おこ

してモニターに映し出します。話している人にライトを当て、音声も聞き取りやすくなりました。

大正時代の列車の再現は、劇場での舞台を思わせます。この登場人物たちは、その走っている場所がら東北からの移住者が多く見うけられます。その当時、北海道には全国から様々な職種の人が集まってきていて、日本の都市別人口ベスト20に北海道から三都市がランクインしていました。その中には、アイヌや外国人なども住んでいたはずですが、そんなことにも、思いをはせながら時間旅行を楽しんでください。



大正期（1912～1926年）中頃 ～寒い2月の夕暮れ、列車の中からドラマがはじまる～

アイヌ民族文化研究センターだより

新センター長よりごあいさつ

佐々木 利和

アイヌ民族文化研究センター長



アイヌ語地名研究の第一人者・山田秀三の足跡をたどる調査より 岩内のボンモイワを訪ねて

佐々木利和と申します。この4月1日付けで当館のアイヌ民族文化研究センター長を仰せつかりました。小川正人さんの後任ということですが、小川さんよりもはるか年長の老体です。アイヌ民族文化研究センターの業務はすでに小川さんが本紙に書かれているように、「2015（平成27）年の北海道博物館発足以後、博物館の一部門であるアイヌ民族文化研究センターとして、様々な展示や普及行事の企画・実施を担ってきました。これからは、道立の資料保存利用機関として、資料を整理し、公開し利用を進めていく役割も改めて充実させていきたい」（『森のちゃれんがニュース39号』）という方向性のもと、アイヌ民族文化に関する資料の調査研究及び整理、研究成果の普及そして研究の支援などが業務としてあげられており、センターの職員は肅々とその仕事をこなし、成果をあげています。

かかる職員の方々の仕事の邪魔にならぬように、老生はなにをなすべきなのでしょう。お話をいただいてから、老生なりに下手な考えをめぐらしてみました。第一に頭をよぎったのは、いうまでもなくその存在はつぎのおさがいらっしやるまでの留守居役なのだ、と。そしてそんな留守居役が職員の

方々の仕事に接しながらできることはなんでしょうか。

北海道博物館は人文系や自然史系、産業史系などを含む文化財を対象とする総合博物館ですよ。

老生は古い博物館員です。それも長く勤めていたのは古美術や古文化財をその保管、展示、調査の対象とする博物館でした。総合博物館での仕事は初めてなのです。非常勤研究員としてお声をかけていただいて10年。その間、アイヌ民族文化に関わる仕事をさせて

いただきました。そういう機会をいただきながら、なぜか、総合博物館でのアイヌ民族文化の展示はどうあるべきか、ということに関してふかく思いをめぐらしていなかったようです。

任が解けるまで、老生はそのことについて、ひとつは展示論的に、いまひとつはアイヌ民族文化論の上から考えてみたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。



第4回蔵出し展「アイヌの衣服—北海道博物館の収蔵資料から—」の展示室より

活動ダイアリー

2025年3月～2025年5月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。
 ※教育普及活動の担当あるいは講師で、所属の記載が無い者は当館職員です。

- 3月1日(土)
 ■自然観察会「動物の足あと調査」を開催。担当：表深太・水島未記・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ。
 ■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)第6回」を開催。担当：三浦泰之。
- 3月8日(土)
 ■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)第7回」を開催。担当：三浦泰之。
- 3月9日(日)
 ■特別イベント「クマゲラー斉調査2025」を開催。主催：野幌森林公園を守る会、共催：北海道博物館。担当：水島未記。
- 3月15日(土)
 ■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)第8回」を開催。担当：三浦泰之。
- 3月16日(日)
 ■特別イベント「はじめての「トンコリ」体験③」を開催。担当：甲地利恵。
- 3月20日(木・祝)
 ■「楽器 見る・知る・考えるー北海道博物館資料+柘谷隆男氏コレクション」ミュージアムトーク開催。担当：甲地利恵。
- 3月23日(土)
 ■子どもワークショップ「ヒツジの毛にふれてみよう② フェルトの雪だるまストラップ(同日2回開催)」を開催。担当：会田理人。[写真1]
- 3月24日(日)
 ■特別イベント「はじめての「トンコリ」体験④」を開催。担当：甲地利恵。
- 3月28日(木)
 ■北海道博物館研究紀要第10号、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第10号、北海道博物館資料目録第4号 全国樺太連盟資料2を刊行。* PDFデータを当館ウェブサイトで公開。
- 4月5日(土)
 ■はっけんイベント「アイヌ文様の卓上カレンダーを作る」を開催(6月1日までの土・日・祝・振)。
- 4月6日(日)
 ■第24回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考えるー北海道博物館資料+柘谷隆男氏コレクション」閉会。
- 4月12日(金)
 ■総合展示室 クローズアップ展示⑩～⑫を展示入替(⑩・⑫は6月12日(木)、その他は8月7日(木)まで)。

- ⑩北海道の白亜紀アンモナイト化石、大集合!
 ⑪クマ祭りを描いた絵師たち
 ⑫北海道の双穴あれこれ
 ⑬渡島半島のアイヌ民族、函館で明治天皇を迎える
 ⑭新しく仲間入りしたアイヌ民族に関する資料たち[写真2]
 ⑮若手県から北海道へ渡った神楽
 ⑯たくぎん(北海道拓殖銀行)
 ⑰北海道のカタツムリの多様性
- 4月12日(土)
 ■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう!」を開催。担当：水島未記・表深太・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ。
- 4月18日(金)
 ■北海道博物館開館10周年記念展「北海道博物館10年の歩み」開催(2026年3月31日(火)まで)。
- 4月19日(土)
 ■特別イベント「博物館のウラ側を見てみようー楽器編(同日2回開催)ー」を開催。担当：甲地利恵・青柳かつら・櫻井万里子・高橋佳久・鈴木明世・鈴木あすみ。[写真3]
 ■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)①」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
- 4月26日(土)
 ■第4回蔵出し展「アイヌの衣服ー北海道博物館の所蔵資料からー」を開催(6月15日(日)まで)。
- 4月29日(火・祝)
 ■ミュージアムトーク「第4回蔵出し展「アイヌの衣服ー北海道博物館の所蔵資料からー」の展示の見どころ」を開催。担当：亀丸由紀子。
- 5月3日(土・祝)～6日(火・振)
 ■屋上スカイビュー特別開放を開催。
- 5月10日(土)
 ■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)②」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
- 5月17日(土)
 ■アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～(全4回)①」を開催。担当：吉川佳見。
- 5月21日(水)
 ■館内定例研究報告会を開催。発表者：各研究代表者。
- 5月24日(土)
 ■ちゃれんがワークショップ「蔵出し展「アイヌの衣服」こぼれ話(同日2回開催)」を開催。担当：亀丸由紀子。

- 5月25日(日)
 ■ちゃれんがワークショップ「のこぎりでネームプレートをつくろう」を開催。担当：青柳かつら・山際啓紀・鈴木明世。
- 5月31日(土)
 ■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)③」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
 ■アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～(全4回)②」を開催。担当：吉川佳見。



写真1



写真2



写真3

人事異動

〈 〉は前職。2025年4月の組織機構改正により部課名等が改正されました。内部異動(4月1日付)は職位の昇任者のみ記載しています。

- 退職(3月31日付) 館長)石森秀三、(学芸副館長兼研究部長兼アイヌ民族文化研究センター長)小川正人、(総務部企画グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究主査)遠藤志保、(学芸部博物館基盤グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究職員)大谷洋一、(学芸部道民サービスグループ兼研究部歴史研究グループ学芸員)右代啓視、(学芸部道民サービスグループ解説員)越田雅子、堀泰子
- 転出(4月1日付) (副館長)須田光政、(総務部長兼総務部総括グループ主幹)島村哲也、(総務部総括グループ主幹)小野寺琴、(総務部総括グループ主査)藤田竜太・丹羽章夫
- 着任(4月1日付) 館長：荒川裕生、アイヌ民族文化研究センター長：佐々木利和
- 新任(4月1日付) 学芸部展示・資料課展示係兼北海道研究センター(人文系)学芸員：波田尚大
 学芸部展示・資料課資料情報係兼北海道研究センター(人文系)学芸員：柴野初音
 事業部連携協働課兼アイヌ民族文化研究センター学芸員：石井祐実
- 転入(4月1日付) 副館長：菅井信宏、総務部長兼総務課長：山口拓磨、総務部企画課主幹：鈴木健介、
 総務部総務課総務係長：浅野亮太、総務部総務課専門主任：児玉満
- 内部異動(4月1日付) 事業部長兼博物館研究センター長：鈴木琢也、
 (昇任者のみ) 学芸部展示・資料課研究主査(展示)兼アイヌ民族文化研究センター研究主査：吉川佳見
- 再任用(4月1日付) 事業部連携協働課兼アイヌ民族文化研究センター研究主査：小川正人

来館者数

○2025年3月					
総合展示室	4,669人	特別展示室	4,279人	はっけん広場	825人
○2024年度合計					
総合展示室	66,184人	特別展示室	39,222人	はっけん広場	8,603人
○2025年4月～5月					
総合展示室	12,418人	特別展示室	7,790人	はっけん広場	2,256人
○累計(2015年4月～2025年5月)					
総合展示室	902,556人	特別展示室	622,077人	はっけん広場	137,049人

森のちゃれんがニュース 第40号

発行日：2025年6月26日
 編集・発行：北海道博物館
 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
 Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
 ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>
 ©Hokkaido Museum, 2025